会員の広場	2021年5月1日発行メールマガジン第10号

春ですね。サシバとナマズの話です。　　浅間 茂

春ですね。散歩に出かけると、キジがケンケンと鳴き、用水路にはコイが水しぶきを上げています。近くの平田の水田に、今年もサシバが飛来しました。サシバは良好な谷津田の指標で、今まで平田には繁殖していませんでした。ところが４年前から姿を見せるようになりました。３年前から繁殖に成功し、２年続けて雛が２羽巣立ちました。今まで繁殖していなかった場所で繁殖するようになった理由は、多分ヌマガエルでしょう。５年前から急激に増え、あちこち飛び跳ねています。ヌマガエルが増えればそれを食べるヘビも増え、カエルやヘビを餌として子育てに成功したと思われます。減ったのが水田のクモです。コモリグモ類が少なくなりました。といってもクモのデータを取っていないので後の祭りです。今年もサシバが飛来しました。

写真１．今年も飛来したサシバ

手賀沼に水草を取り戻す試みに長らく取り組んでいますが、その基地とすべくミニ手賀沼にせっかくガシャモクなどを植栽しても、あっという間にアメリカザリガニに食べられてしまいます。人海戦術を試みましたが、全部取り除きません。それでナマズを放して見ました。効果覿面です。ナマズがいるだけで、ザリガニの行動が抑制されるのです。その放したナマズは印旛沼漁協から譲り受けたのですが、今やなかなか目にしません。アメリカナマズは沼で産卵しますが、ナマズは水田に入り込んで産卵します。

３年前の大雨の後、田植えを終えたばかりの水田にナマズが入り込み、水田の深みのあるところで、稲を倒しながら産卵を行っていました。当然その水田にはゲンゴロウブナやコイも入り込み、あちこちで水しぶきを上げ産卵していました。魚が入り込み産卵しているのは、特定の水田だけでした。どのようにして水田入り込んだのか、調べてみると用水路と水田の配水管の高さの違いでした。増水した際に用水路と配水管の差が少ない水田に魚が入り込んでいました。ということは、わざわざ魚道をつくらなくても配水管の高さ次第では水田の中に魚が入り込んでくるのです。その後雨が降らず、水田が干上がり、アオサギやカラスが魚を狙って集まってきました。急いで生き残っていたナマズ３匹をタモ網ですくってミニ手賀沼に放しました。その後注意深く見ていると、ナマズの稚魚が孵り、雨の降った後に沼に戻ることができたようです。このようにして古利根沼のナマズは命を繋いでいきてきたのです。今年はどうなるか、大雨が降った後に見にいきます。最近はアオサギが群れて魚を狙っており、心配です。

ところでナマズはボルネオのキナバタンガン川沿いのキャンプ地では食事の一番のおかずです。コロナが収まり、またボルネオにいけることを、私は心待ちにしています。

写真２. 増水し配水管から侵入

写真３. 水田に入り込んだナマズ

コスタリカとエコツーリズム

コスタリカは中米パナマの北に位置する九州と四国を合わせたくらいの小さな国で、主要産業の一つが観光業、近年環境保護とエコツーリズムに力を入れているとのこと。鳥好き、虫好き、自然好きの私にとって一度は行ってみたい国だった。コロナがヒタヒタと感染拡大してはいたが、昨年３月思い切って旅立った。

メキシコシティ経由で首都サンホセに到着、早速バスに乗り込み最初の宿泊地に向かう。途中で昼食をとったレストラン、欧米からの観光客が多く見受けられ、お目当てはバードウォッチングのようだ。旅行中立ち寄ったほとんどのレストランは緑に囲まれ、鳥の好む果物などが餌台に置いてあるのでいろいろな鳥が次々やって来る。客は食事中や食後バードウォッチングが楽しめるようになっていた。ナマケモノが樹上でのんびり木の葉を食べる様子が見られたこともあったが飼われているのではない。ナマケモノの好物の木があるからなのだ。

ミツユビナマケモノ

ホテルは森の中に点在するコテージ型、部屋にはテレビはおろか電話もない。朝は賑やかな鳥の声、所によってはホエザルの声で目覚める。モーニングコールは添乗員が走り回ってのドアノック、ご苦労様。朝食前に敷地内を散歩すると鳥以外のいろいろな生き物にも出会えた。アグーチ（ネズミ目）がごみ捨て場をあさっていたり、イグアナが屋根で日向ぼっこをしていたりと毎日新発見がある。ベッドに寝転んでいたら高窓越しに動くものが見えた。大きなくちばしを持つオオハシの仲間だ。すぐカメラで証拠写真をパチリ。どのホテルも緑に囲まれ餌は豊富、たくさんの生きものが自由に行き交っていた。

サンショクキムネオオハシ

コスタリカが世界中のバードウォッチャーに人気がある理由の一つは最も美しい鳥といわれるケツアールが見られるから。手塚治虫の「火の鳥」のモデルともいわれる鳥だ。ツアーの途中ケツアールを探しにホテルの裏山、民家の裏庭や牧場にも行った。３月はケツアールの繁殖期、オスとメスが交互に抱卵するケツアールは交代のため巣穴にやってくる。待っていればかなりの確率で見られるのだ。ラッキーなことに何度も見ることができた。この鳥一時は絶滅の危機もささやかれたが、今は安定しているそうだ。政府公認ガイドによれば、ケツアールの主食となるリトルアボカドや営巣する木を保護することでケツアールの生息数が安定し、それが観光客を呼び込み収入につながり、それがまた森の保護につながっていく好循環ができたとのことだった。

参加したツアーはコスタリカ国内数か所を２週間かけて旅するものだったが、行く先々で地元のガイドが案内をしてくれた。彼らはいつどこに何がいるか熟知している。彼らの案内で白い小さなコウモリやハチドリをはじめとするきらびやかな色彩の多くの鳥、モルフォチョウをはじめとする虫や小さいけれど存在感抜群の毒ガエルたち、ワニやイグアナなどに出会え、最初で最後のコスタリカ旅行はとても充実した楽しいものになった。

シロヘラコウモリ

最後の訪問地マニュエルアントニオ国立公園へ向かう道路の両脇で十数キロ続くアブラヤシ畑を見た。内陸の豊かな熱帯雲霧林の中で過ごした後に見たアブラヤシ畑は一様で変化がなく異様に思えた。生態系に良いはずないだろう。が、農業が主要産業のコスタリカにとって安定した収入源であり、アブラヤシは私たちの身近でも多用されている。どう向き合えばよいのだろう。

自然保護で生態系を守りエコツーリズムで観光客を呼び、成功しているように見えたコスタリカ、コロナ禍でロックダウン、海外からの客が来なくなった今観光業に携わっていた人たちはどうしているのだろうか、陽気で優しい人々の近況が気になっている。世界のコロナ禍が収まりまた自由に旅ができる日が１日も早く来ますように！

小川洋子　（八千代市）

コンゴウインコ

コチドリ　♪雨の降る日は傘になり

自宅近くに出来た高齢者向けの介護付マンションの職員用駐車場は未舗装の砂利敷きでした。周囲には雑草の生えた空き地も残っていました。そこを通った時、コチドリが子育てしているのを発見したので、施設の職員にお願いして後日撮影させてもらいました。
職員が出勤する前なら駐車場は空いていて邪魔にならないので、日の出時刻から２時間位が撮影可能時間で、文字通り朝飯前の一仕事でした。
コチドリはツバメと同様に春渡来して日本で繁殖する渡り鳥です。繁殖場所は小石や砂交じりの河原等がお好みのようですが、河川改修や公共施設用地化により営巣の適地が減少したので、似た環境の駐車場の片隅で繁殖したものと思います。
営巣と言っても地面に浅い凹みをつくるだけで、そこへ直接産卵しますから鳥の巣のイメージとはかけ離れています。むき出しの卵は無防備に思えますが、巧みなカモフラージュ効果により周囲の小石と見分けが付きません。

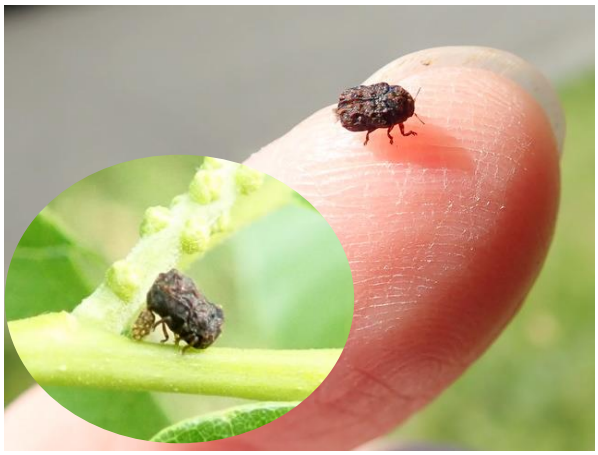
孵化した雛は直ぐに歩けて自分で餌を採りますから親は雛の安全を保つのと保温が主な役割です。
車を降りてカメラを構えると親鳥が目立つ場所に出てきました。（写真上）これは害敵の注意を引いて雛から目を逸らす目的ですから無用に刺激しないように腰を屈めてじっとしているとやがて普段の行動に戻ります。
雛は体が冷えると時々親の元へ駆け寄りお腹の下へ潜り込んで温めて貰います。（写真下）。雨の日には雛はずぶ濡れになっても自分で餌を探さなければ飢えてしまいます。雨の中を歩き廻って濡れたら、時々はこの格好で保温して貰しかありません。
森進一が母を歌う一節に♪お袋さんよ　お袋さん雨の降る日は傘に～なり
これは喩的な表現ですが、野外で子育てする野鳥の親は本当に傘になっているのです。
親鳥の羽毛は油脂でコーテイングされていますから雨に打たれても沁み込むことはありません。なお、普通なら雛は４羽の筈ですから写真の家族の２羽はすでに天敵の犠牲になったようです。

坂本文雄　　（佐倉市）

ムシクソハムシ

新緑を浴びながらの散歩は気持ちいい。柔らかくみずみずしい若葉はこの時期に合わせて生まれたハムシやイモムシがあっと言う間に穴だらけにしてしまう。ヤマグリの葉っぱに黒い３ミリ位の塊が動いているのを見つけた。ムシクソハムシだ！　それにしても素晴らしい擬態。羽の凹凸がイモムシのウンコにそっくり。この小さな３ミリの体にちゃんと足６本、触覚、眼も口もある。命の機能が備わっている。すごい！　捕まえると肢や触覚を腹面にある溝にぴったりと収納し、見事にイモムシのウンコになった。こんなに小さくてイモムシのウンコみたいな虫、誰も食べたくないと思うが、ムシヒキアブやカメムシ、クモなどに食べられるそうだ。普通種で越冬成虫は４月から５月に卵を産む。卵や幼虫、蛹とも樹上でウンコの殻の中で育つ。新成虫は８月から９月に現れる。指先へ移したら、あっという間に小さな羽を出し、飛んで行った。

可哀想な名前を付けられてしまったけれど、なんて愛嬌のある姿なんでしょう。頑張れーと声をかけたくなってしまう。この時期、コナラやクヌギ、サクラ、ミズキなどで観られる。



左は自分のウンコで卵を塗したムシクソハムシ

山下美佐子　　（東金市）

スイカズラは人気者

昨年はコロナ禍のため、自然観察は主に家の周りでした。

現れた虫たちがそこにいる理由がわかったとき、とても嬉しくなります。

写真にはありませんがエグリヅマエダシャク幼虫とニセリンゴカミキリが葉っぱにきていたこともありました。葉っぱに２票。ちなみに、私は、スイカズラの花の香りに１票。

ホシホウジャク

ヒメコンボウハバチと幼虫

スイカズラクチブサガと繭

ニジュウシトリバ

松本美千代　　（千葉市）

北の国だより

私の住む札幌市では、４月22日に桜が開花しました。千葉県（銚子市）の開花が３月22日ですから、ちょうど、1か月遅れですね。私も、北海道に引っ越して知ったのですが、札幌市の桜の開花の基準木は、千葉県と同じくソメイヨシノなんですよね。札幌市までがソメイヨシノで、札幌市より東がエゾヤマザクラです。桜が咲くと春本番という感じですね。（佐野由輝）

北海道を代表する桜「エゾヤマザクラ」

４月も下旬になると、札幌市内のエゾヤマザクラも満開となり、道歩く人の目を楽しませてくれています。エゾヤマザクラは、千葉県に生えているヤマザクラと比べ、花の色が濃く、遠くから見ると、木全体がぼんやりと赤く見えます。

冒頭にも書きましたが、札幌市の開花の基準木はソメイヨシノですが、市民に親しまれている桜といえば、やはり、エゾヤマザクラですね。そして、北海道の花見といえば、ジンギスカン。一日も早く、コロナが収束し、桜の木の下で人々がにぎやかに集まる日が来ることを願っています。

北海道の妖精たちは街の中にも降りてくる？

千葉県では、ソメイヨシノが開花するころ、カタクリをはじめとする春の妖精「スプリングエフェメラル」たちが、雑木林の林床を賑わしてくれますよね。札幌市も、やはり、桜の開花を合図に、春の妖精が舞い降りてくるのですが、大自然と大都市が近接している札幌市では、車が行き交う大通りの脇にも春の妖精を見かけます。以下の写真は、全て、通勤途中に見かけた妖精たちです。

※左から順番に、エゾエンゴサク、カタクリ、キバナノアマナ、ニリンソウ、エンレイソウ

白頭巾と紫頭巾の共演

札幌市郊外に広がる野幌森林公園です。以前も紹介したことがありますが、200 万都市札幌郊外の住宅街に囲まれた中に 2,000 ヘクタールもの原生的な自然が残されています。札幌市を含む石狩平野は、かつては、湿地帯がひろがっていまいた。その名残が残る野幌森林公園では、ミズバショウやザゼンソウが咲きほころんでいました。こうしてみると、ミズバショウは白頭巾（大瀬康一）、ザゼンソウは紫頭巾（松坂慶子）に見えませんか？